

成人向

神待ち少女



モモンガ倶楽部

夏の暑さもひと段落したころ
某県内、市街地から少し離れた
農耕地も目立つ住宅街



ある男から友人二人にメールが届く、男らはそのメールに添付されていた画像を見て驚く…、そして指定された日時にメールを送った本人宅に赴く

チャイムが鳴るとドアが開き、中から男が一人二人を出迎える

「山さん、小野ちゃん、待ってましたよ」

「どもども、シオさん、連絡ありがとっす」

「さあさ、どうぞ中へ」

二人は案内された部屋へと入る

「いや、びっくりしましたよ…あの写真！」

「あれ、マジですか？撮影場所ココっすよね？」

「まあまあ、落ち着いて…ふふふ、見ればわかりますよ！」

「えっ？今も…いるんですか？」

シオは不敵な笑みで二人にうなづいた

「マジですか！さてさて…」

「このドアの中に…いますよ！」

シオが部屋のドアを開けると拘束された全裸の少女の姿が

二人の目に飛び込んできた。



山と小野は拘束された少女を観て一瞬言葉を失った……

「うわぁ、マジじゃないですか!？」

「本物の小○生?」

「マジですよ、○学女○、○年生の○女、1●歳」

拘束された少女は現れた男二人を見上げると男たちの視線から逃げるように顔を隠した。

写真で見るよりあどけなさが残るその面立ちに高揚感と背徳感を感じる男二人であった

「いやっ、でもこれかなりヤバイんじゃないですか」

「未成年……犯罪ですよね」

「どっから拉致ってきたんすか?」

「人間が悪いなく、拉致ってなんかいませんよ」

「エンコウとかですか?」

シオは少女との経緯を話し始めた

「いや、なに、一ヶ月ほど前の事なんですが……」

いつもの街撮りに出かけて、街はずれの公園あるじゃないですか……」

「あゝ、あの子供が多いとこね」

「穴場っすよね」

「いつもの様に少女を盗撮していて

大方撮り終えたのでコーヒー飲んで一服してたんですよ、自販機のベンチで……」

そこに、カエルのリュック背負って座ってたこの娘がいたんですよ、横目で気にしながらまたちよっと撮影しに行って

1時間ぐらいですかね……夕方のはら

お帰りのチャイム鳴り出して、

公園に人氣が無くなってきたんでこちらも撤収しようとして自販機の前通ったら

この娘がまだ座ってたんですよ!」

「親とか友達とかは一緒にじゃなかったんですか?」

「まあ、一人だったようで気になって

声かけたんですよ」

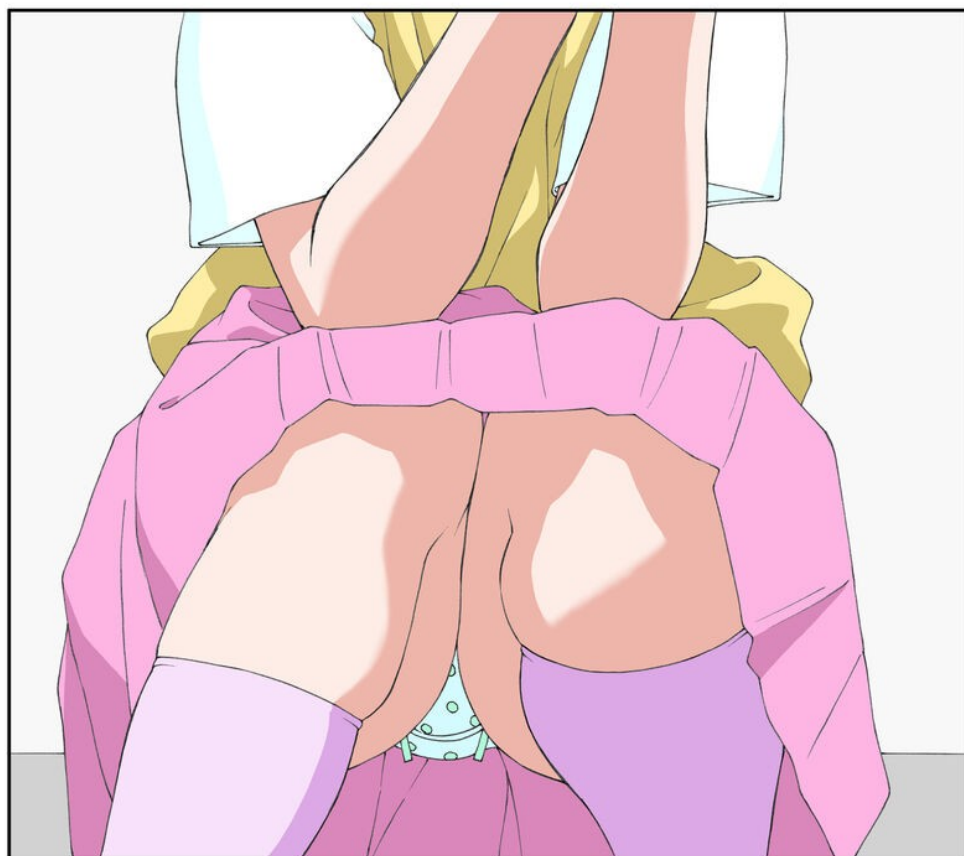
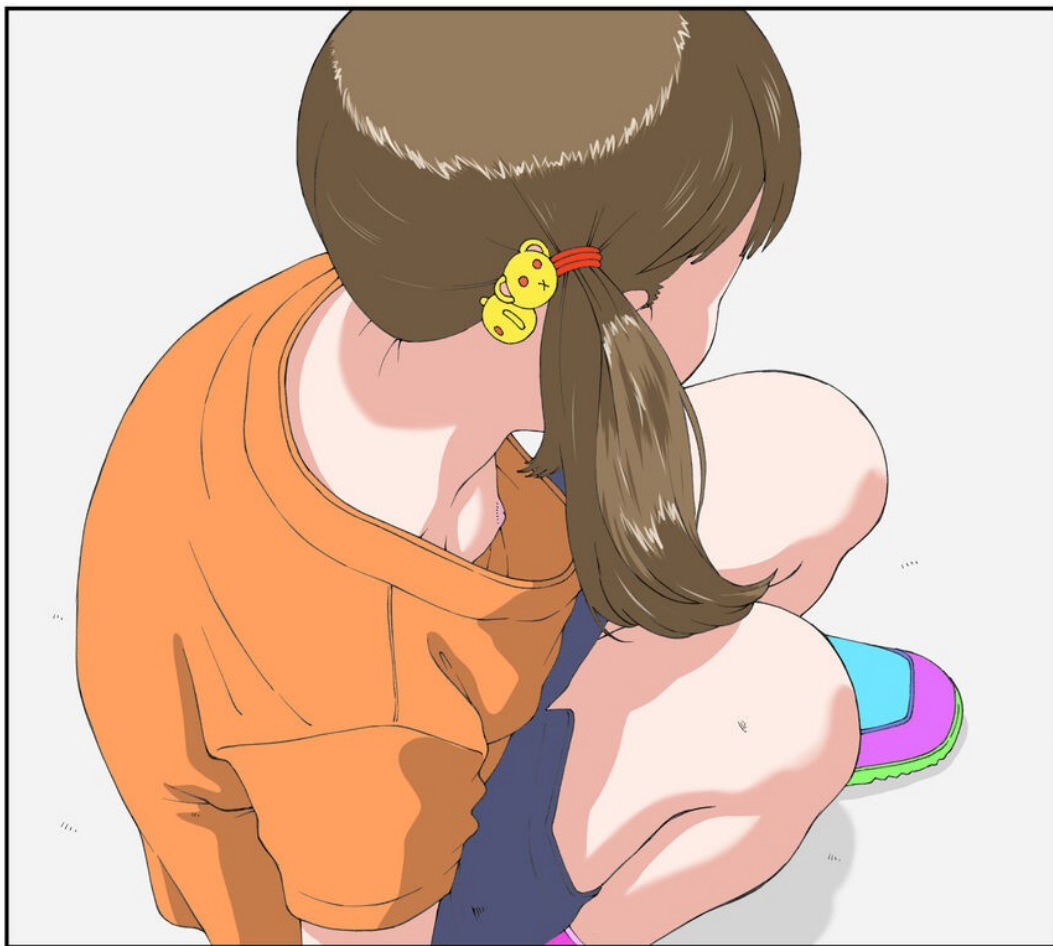
「えっ、声かけたんですか……」

「話聞いたら、家出してきて行くところが

無いって……ネットで知り合った女性

の家に泊めてもらおう約束だったらしいんですよけど、まあドタキャン喰らったみたいで」

「で、連れてきたと?」





「ははは、まあそうですね：お腹もすいてるって

言うし、飯食わせて、それから一応ケーサツに

連絡しようと思ってたらケーサツは嫌だと

泣き出しちゃったので：」

「で、どうしてこういう状況になるんですか(笑)?」

「まあ、私たちはペドじゃやないですかゝ5年前に
3人で旅行した先で買った少女が忘れられず：」

「あゝ、あれは可愛かったですね、丁度この
娘ぐらいでしたね」

「こんなチャンスめったに無いし一応聞いたんですよ」
「何を？」

「うちに泊めてもいいけど、オジさんロリコンだから
君みたいな女の子にイタズラしちゃうかもよゝって
そしたら、私のカメラを見て写真ぐらいなら撮っても
良いから泊めて欲しい：と」

「で、こうなったと：」

「シオさん：鬼畜すね！」



「そんな角に立ってないでこっち来て座りなよ
キンチョーしてる?」

「知らない男の人の家初めてきたから…」

「家出とかした事あるんだ」

「前に…2回くらい、女の人の所に泊めて
もらったけど」

「なんで、家出してきたの?家どこ?近く?」

「…」

「理由は言いたくない?…まあ、いいけど」

「あの、どれくらい…いてもいいですか?」

「あゝ、好きなだけいていいよ、一人暮らしだし
部屋もあるし」

「ありがと…です」

「でも、さっきも言っただけどオジさんガチロリだから」

「…ガチ…ロリ…」

「そう、ガチンコのロリコン、君みたいな少女が

大好きなんだよ!エロい事しちゃうけど良いの?」

「写真位なら別にイイけど…下着とかなら」

「名前はなんていうの?」

「そら」

「へゝ、そらちゃんか、可愛い名前だね」

シオはそらをモデルに写真を撮り始めた

「そらちゃん、結構おっぱい大きいよね
服の上からでもわかるよ」

「普通かな、みんなこのぐらいだし」

「じゃあさ、服めくって見せてよ」

「えっ?それはムリ…」

「じゃあ、ケーサツに家出少女連れて

行かないといけなくなるじゃん、約束

まもらないんじゃない?」

「ケーサツはヤダ、下着でもいいでしょ」

「早く早く、めくって!」

そらはセーターをめくり隠しながら
胸を見せる

「スポーツブラしてるんだ、可愛いじゃん
そのままブラ上げちゃおうか」

「ムリ…ムリだもん」

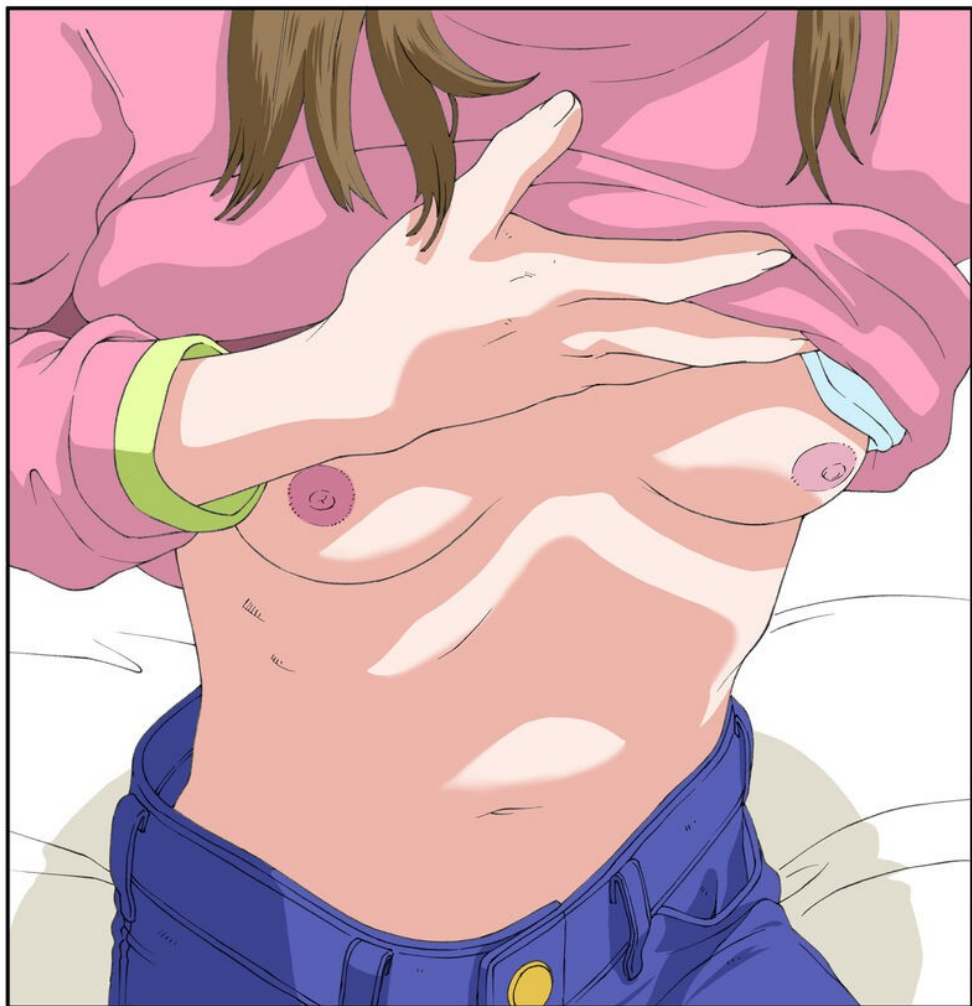
「きれいじゃん、形もいいし、大丈夫

見せちゃおう」

「恥ずかしいよ、そんなの」

「ケーサツ?見せる?」

「ずるくない?…もう」

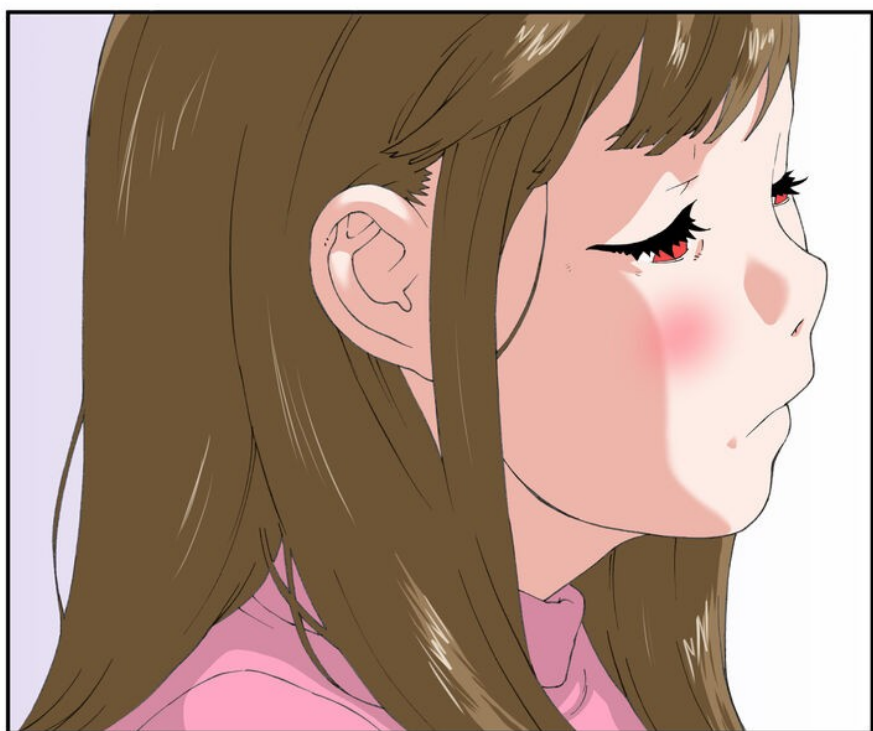


「ちょっと見せるだけだからね」

そう言いながらそらはブラをたくし上げ胸を
シオに見せる

「そらちゃんのおっぱいすごい可愛いじゃん
色もきれいだし、柔らかそうだし…ホント
もったいないよ、殆どの女の子が一番奇麗な
時代を誰にも見せずに送ってるんだよね…」

「もういいでしょ、恥ずかしい」



シオはおっぱいを手始めに次から次へと
要求を出し言葉巧みにそらを全裸へと導いていく

気づけばそらは全裸で布団の上に寝かされ卑猥なポーズで
写真を撮られてる

「そらちゃんてホント綺麗な身体してるね、おっぱいもあそこも
顔も可愛いしオジさん好みだしね」

「そら、別に可愛くないよ…」

「そらちゃんはさ、エッチしたことある？」

「エッチって…セックスの事？」

「そうそう！」

「あるわけないじゃん、そんなの…」

「ちよつとまねしてみる、オジさんと」

「えっ？ムリ、したことないし」

「オジさんそらちゃんのアそこも見ちゃったしさ、そらちゃんも
見せたってことはエッチしても良いってことなんだよ」

「え、そんなの…ムリだよ…」

「折角仲良くなれたんだし、いつか誰かとやるんだろうし
失敗しないよう練習だと思ってさ、嫌だったら途中でやめるから
やってみようよ」

「うーん、わかった…」



撮影とは打って変わり、そらは緊張の面立ちで布団に寝そべっていた

シオは全裸の少女を目の前に興奮を隠せない、パンツの中のイチモツがそれを語っていた
細く長い手足をシオのごつい指先が淵をなぞるように滑るたびこわばった身体がビクンと
反応する

「そらちゃん、とても良い匂いがするね」

形の良い手にフィットするおっぱい、細く寸胴な腰、柔らかく手に吸い付くハリのあるお尻
毛も生えていない股間に顔を向けると手で隠す

「ヤダ…」

シオは手を振り払い両足を開かせ、おもむろに顔を股間にうずめる
ぴったりと閉じた性器を指で開き溝に沿って舌を動かす、シオの頭を掴んだそらの手が
力弱く震えている

「どう？初めてあそこを舐められた気分は…」

「変な感じ、くすぐったい」

「でも、気持ちいいでしょ、濡れてるし」

「…」

「女の子は気持ちいいとオ○ンコが濡れて来るんだよ」

「そうなんだ、わかんないけど」

「指を入れてみるよ…」

「怖いよ…」

「自分で触ったことない、ココ」

「ううん、無い」

「ココの穴、わかる？ここにおちんちん入れるんだよ」

シオは広げながら指を膣に挿入していく



「…」

「どお？痛い？」

「うーん、ちよつと痛いよ」

「でもさあ、おちんちんは指より太いんだよ」

「これぐらいは我慢しないと」

「…いっ…痛い」

「痛いのは最初だけって言うから、一回入れちゃえば

あとは気持ちよくなるかもよ」

「うーん…やっぱりやだ…怖いし」

「じゃあさ、少し入れて直ぐ抜くから、いい？」

「ええ？、うん、直ぐ抜いてよ」

「経験したらみんなより早く大人になれるんだよ

友達にも自慢できるじゃん」

「…うん」

「じゃあ、入れるよ」

シオはいきり立ったイチモツをそらの性器に押し

当てる、恐る恐る股間に目を向けるそら

自分の身体に入ってこようとする物を見て驚く

「オジさん、それなに？そんな大きいの入るわけないよ」

「大丈夫だよ、赤ちゃんを産むときはもっと太いものが

ここを通るんだから、これぐらい！」

シオはイチモツにローションを塗り滑りをよくして

そらの性器を押し広げ奥へ奥へと押し通す

「痛い！イタイ、やめて…」

「そらちゃん、逃げないで、力抜いて」

「やだ、やめて、痛いよっ！」

「ほら、半分入ったから、すぐだから」

「痛いよ…痛いってば、やだあ…」

「ほら、ほら、全部入ったよ」

「でも痛いよ、抜いてよ」

「さすがに中は狭いな、我慢して、動くよ」

「痛い痛い！動かないでっ…」

苦痛にゆがむそらを尻目にシオは

興奮しながら腰を動かす

狭い膣に押し戻される感覚を味わい

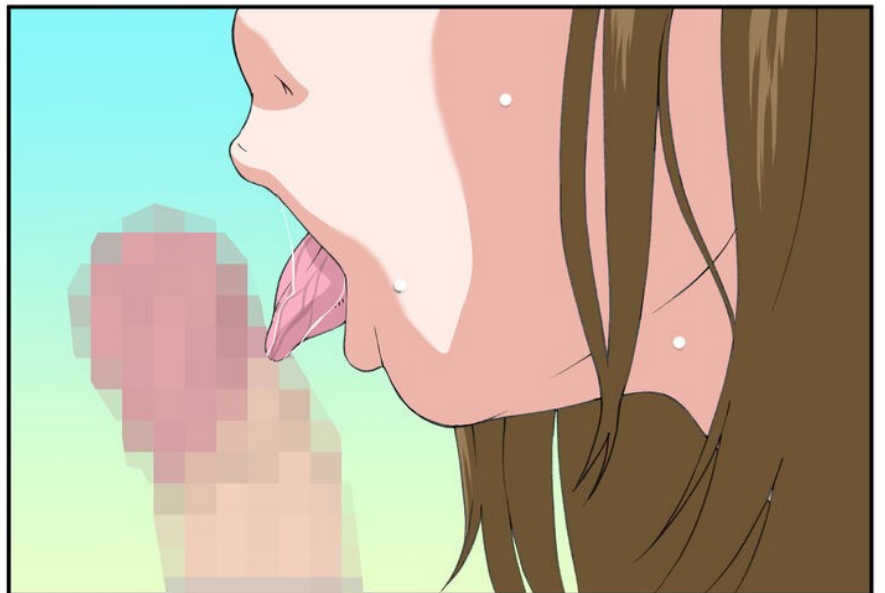
早々にシオは射精してしまう

イチモツが引き抜かれると

鮮血が混ざったザーメンが膣から流れ

出る

「すごくよかったよそらちゃん！」





「それから、毎日最低3回はそらに突っ込んでチンポの味を覚えさせましたよ、この1か月大体の事はしましたね、呑み込みが早いと言うか貪欲と言うか、従順で嫌がらず何でもやりますよ」

「マジですかあ、すげーなー」

「避妊の方はどうしてるんですか？」

「何かね、生理がまだらしいですよ」

「この年齢で来てないんですか？」

「そうらしいんですよ、個人差はあるから、まあ一応薬は飲ませてます、生でやりたいから」

「ははは、鬼畜ですね」

「山さんならそっち方面詳しいでしょ、

元産婦人科医ですから」

「まあ、そうですね」

「で、この娘どうやらマゾ体質みたいで…」

「えっ？マジですか！」

「普通のセックスに飽きてきてちよつと

試しにロープ使って縛ってやってみたんですよ
そしたらいつもより濡れて興奮してたみたいで
これは！と思ったたらどうやらですよ！」

「ロリでマゾ!?最強じゃないですか」

「で、今日二人に来てもらったのは相談と言うか計画があるんで話をしようかと…」

「ほう、どんな話でしょう？」

「まあ、その前にどうです、みんなでそらを味わいませんか？」

「えっ？いいんですか？やっちゃって…」

「マジですかマジですか？」

「小野ちゃん、興奮しないで(笑)」

「私が、見せびらかす為に二人を呼ぶわけないでしょう?!」

「いや、まあ、そうですけど…」

「本物の小○生を味わうなんてこの先無いですよ我々ペドにとっては…」

「たしかに!…」

「本物かゝすげーなー!」

「名前はそらちゃん？」

「そうそう、華村そら、有名私立学校の初等科の学生証持ってて確認しました」

「そらちゃんか、よろしくね!」

「可愛いね、そらちゃん、オジサンたちが可愛がってあげるからね」

「二人とも休みは3日間、もらって来てるんですよね？」

「ええ、言われた通りにもらいました」

「休みの間3人で調教しましょう!」
「ドリンクも大量に買ってありますよ」

「いやあゝついにか…」

「アナルも開発してありますんで、あぶれず行けますよ!」

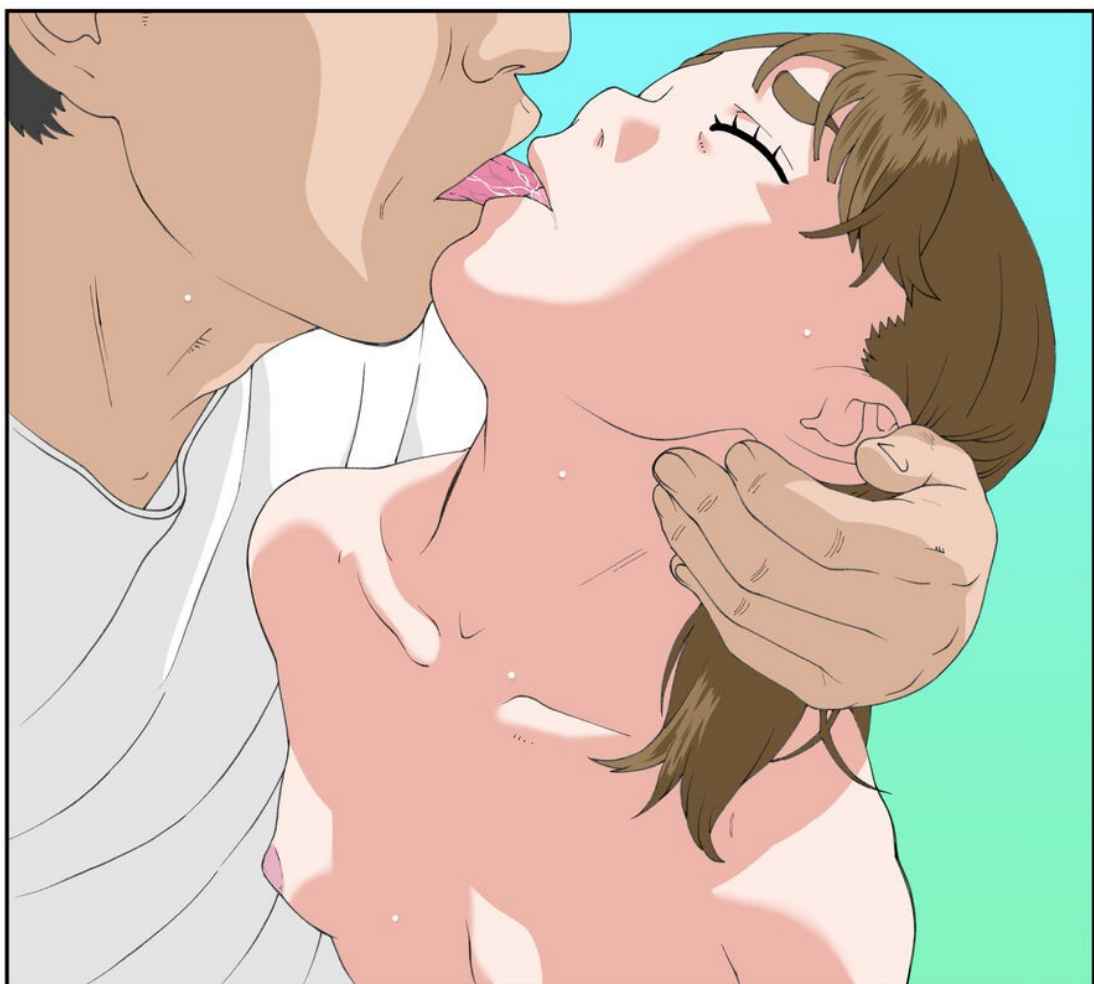
「そら、今日からそらを可愛がって下さる
二人のご主人さまだよ、ご挨拶しなさい」

「山さんパパ、小野ちゃんパパ、そらです
今日からパパたちの肉便器になります
可愛がって下さい。」

「くっつ、かわええなあゝたまらん」

「そらちゃん、キスしよう、お口開けて
うぐっうぐっ、このねっとり感すごいな」

男3人はそらの未熟な身体を存分に
味わい始めた



「さすが、やっぱり華奢ですね、手足も細いしでも、小さくても女ですよね」

「そらちゃんのおっぱいコリコリ、ま〇こ小さいな」

山と小野はそらの未熟な身体を獲物に絡みつくタコのようにねっとり隅から隅まで侵食していく緊張していたそらも二人の愛撫で次第に息使いが荒くなっていく

「辛抱溜まらん！」

「山さん、お先にどうぞ、入れちゃってください」

「良いの？小野ちゃん、僕が先で」

「先輩ですから、遠慮なくどうぞ！」

「じゃあ、お言葉に甘えて…おおっ、さすがに中はキツキツだよ…でもすごい、絡みつく感じ」

「俺はとりあえず口に入れます！そらちゃん、お口開けようか…」

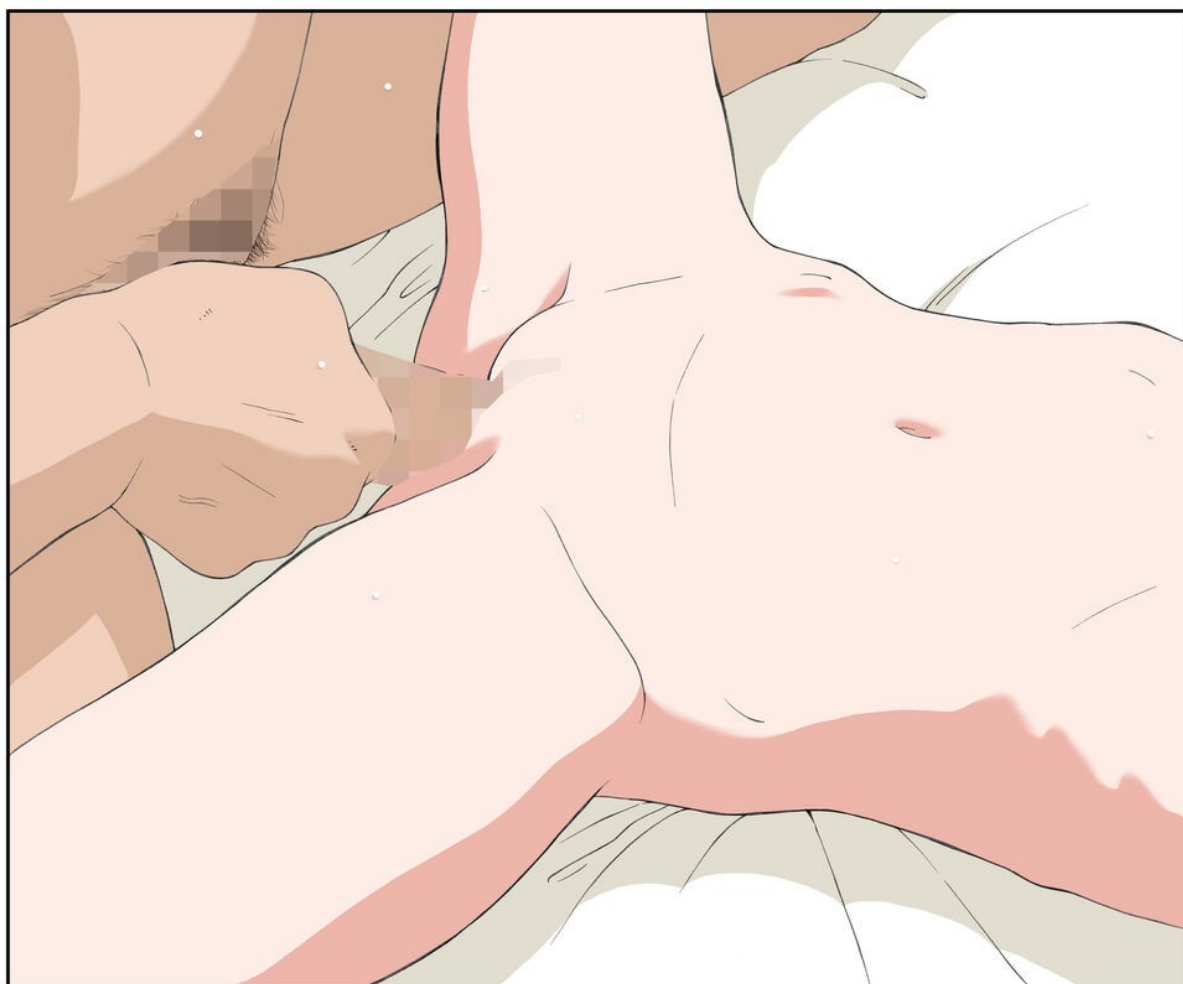
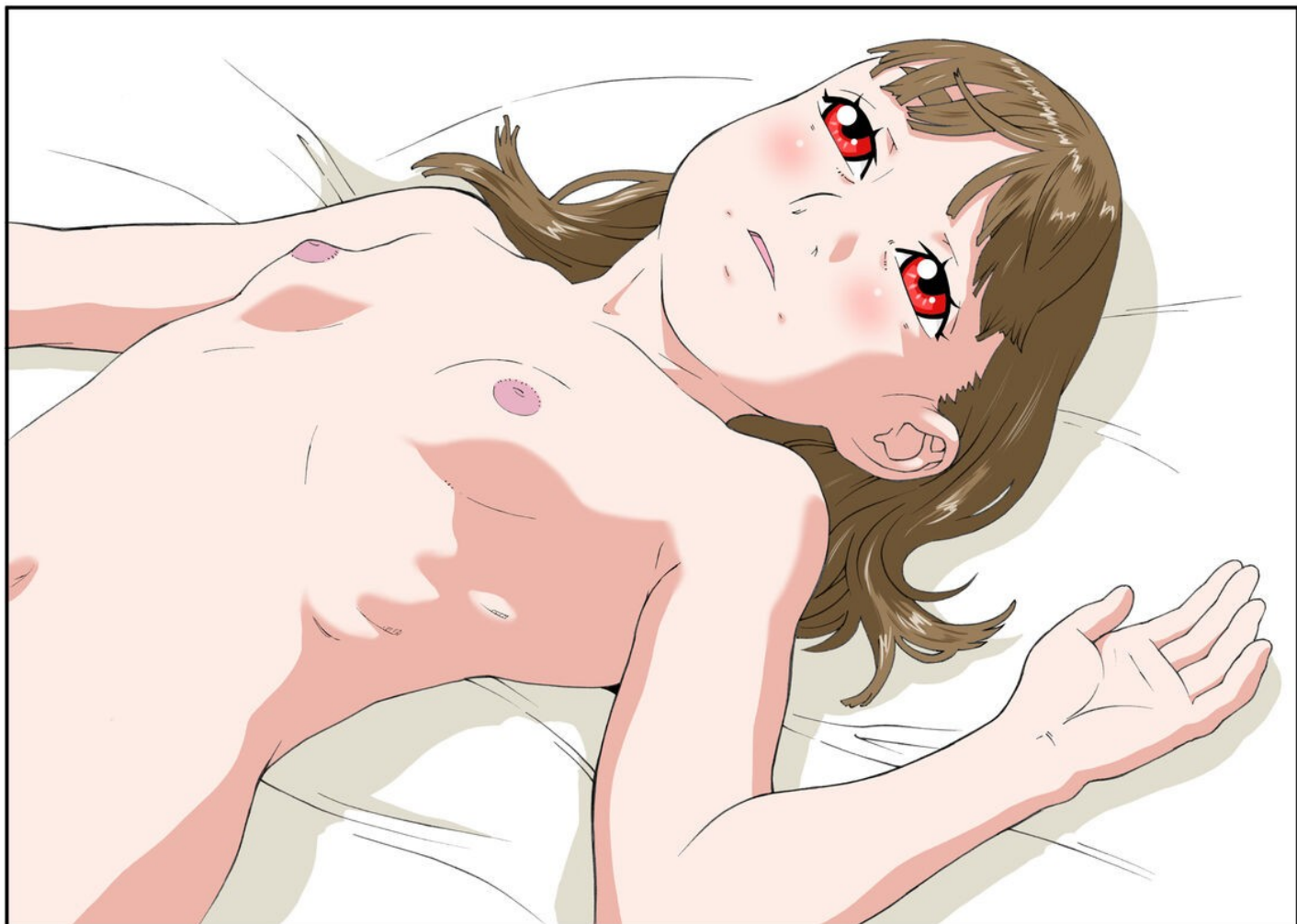
「小野ちゃん、口はどう？」

「山さん、ヤバいっすーぎこちなさがまた吸われる感じっす！」

男二人はすぐにイってしまふ

「シオさん、この娘ヤバイですね、お宝発見て感じですね」

「リアルな少女の威力、絶大ですよ、すぐにこの通りギンギンですよ」



男3人は代わる代わるそらを犯し
そらもまた、未熟ながらも男たちの欲望を
必死に受け止め自らの快楽に変えていった

「ほら、そらちゃん…気持ちよかったら
気持ちいいって声出すんだよ」

「き…気持ちいい…です」

「どこが気持ちいいの？」

「はあはあ…あそこ…」

「あそこじゃないでしょ、おま○こでしょ
おま○こ気持ちいいって、声出して」

「お○んこ…気持ちイイ…」

「そう！それでいいんだよ、イクぞ！」

男3人は大量のザーメンをそらの穴と言う
穴に注ぎ込んだ

食事と睡眠時以外は、3人交代で調教し続けた

若いとはいえ小さなそらにはかなり疲労が
かかっていた、男たちが休憩してる間にも
バイブやローターなどのおもちゃを常に
挿入され動かされていて、休みなしに
刺激されていたからだ。



「こぼさず飲みなさい」



二日目も朝からそらの調教が始まっていた

絶え間なく性器を突かれ、刺激を与えられ
大量のザーメンを身体の中に流し込まれていた

バイブや電マで強制的に刺激を受け

この調教期間中に初めて絶頂に達したそらは
軽い刺激でもイク敏感な身体にされてしまう

絶頂を迎えた瞬間、腰が痙攣し手足を硬直させ
口をパクパクさせる、まるでまな板の上のコイ
の様なそらを見て男たちは面白がって
拘束し動けない状態で刺激を与え続ける

連続して何回くらいイクのか試してみた

20回目あたりを超えたところでそらが叫ぶ

「もう、もうヤダ…やめてえ〜イクのやだ」

男たちはそれでも止めず刺激を与える

「イグ〜ヤメデえ〜ヤダよお…イグ〜」

イッた瞬間そらがうなだれ、体から力が
抜けたように動かなくなる
あまりの刺激に白目をむいて気絶して
しまったようだ。

「白目向いて気絶する人間初めて見ましたよ
こんなになるんですね〜」

「ヤバいですね〜」

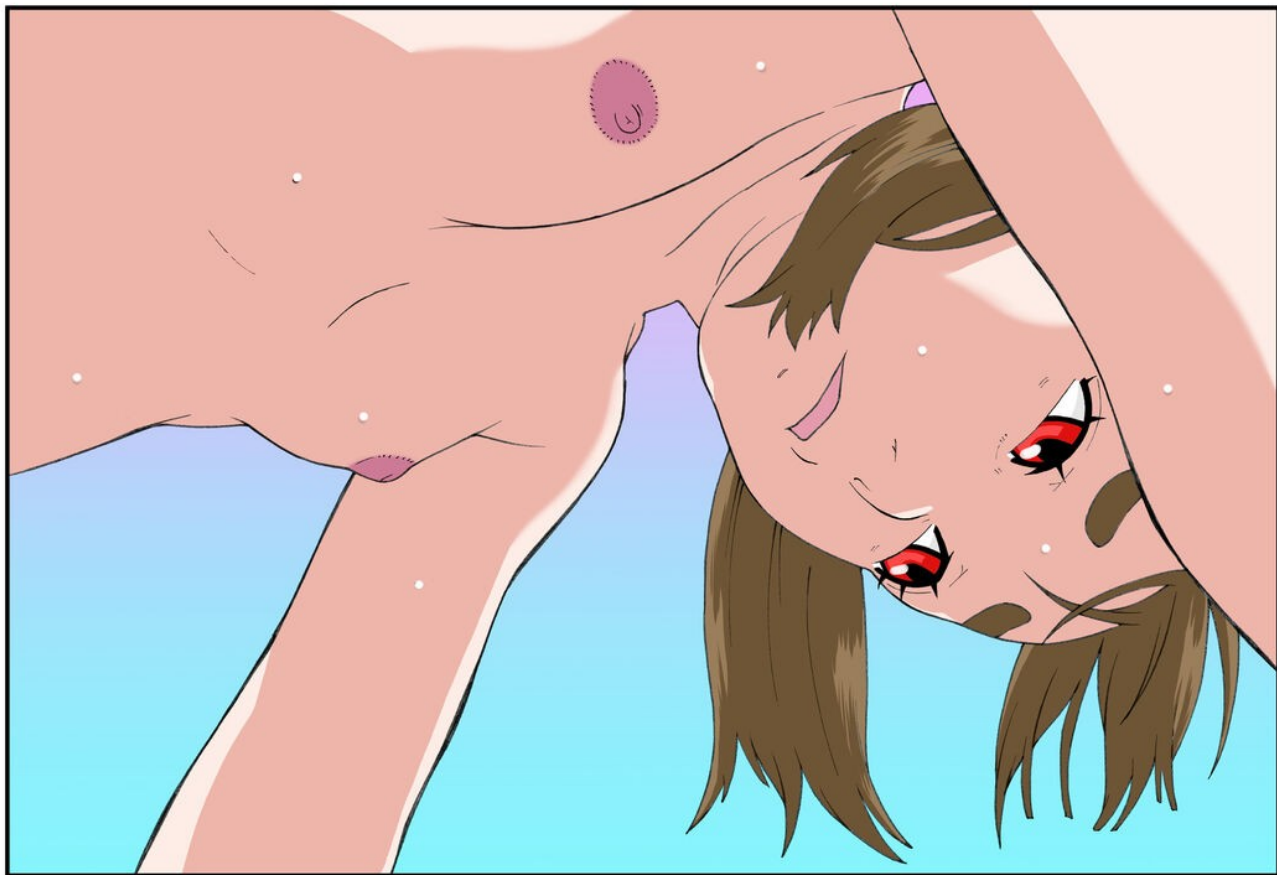
そらが気が付くと男たちは懲りずに
そらを犯し始める

「そらちゃん、気持ちよかった？すごかったね」

「気持ちいいけどあんなのヤダ…」

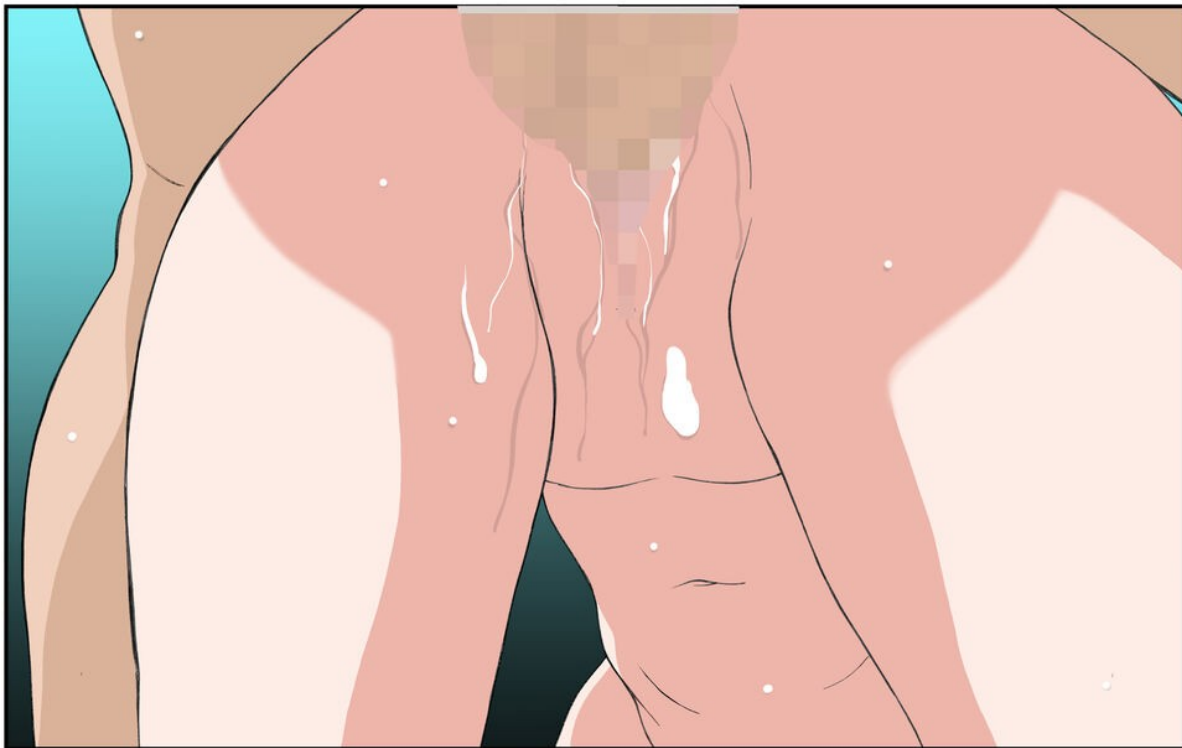
「わかったわかった、怒らんでよ、
もうしないから」

と言いながらバックで激しく突いて中出しする



「あ～、しまるう…気持ちいいよ、そらちゃん」





「そらの子宮にパパの精子を…味わいなさい」





3日目も起き抜けからそらを調教している
3穴を同時に犯しこの日も大量にザーメンを
そらに流し込んでいく…

「いよいよ、3日目ですが、どうですか？」

「全然、飽きないですよ！それに性欲が
収まりません！」

「俺も同じくヤバいです、そらちゃん」

「でしょう！」

「出しても出しても湧いてくるんですよ〜」

「マジで！」

「この後、縛ってやってもいいですか？」

「どうぞどうぞ、山さん縛り系好きでしたね」

「そうなんですよ、何か良いんですよ、縛られた
少女がね」







「ふう〜これで何発出したかわかりませんよ」

「人間の限界超えてるんじゃないですか？」

「ははは…」

「シオさんがうらやましい、こんな娘と毎日出来るなんて…」

「ホントっすよ〜」

「そ、それで最初の話なんです…」

「あゝ、例の…何でしょう？」

「山さんと小野ちゃん二人にご相談と言うか提案何ですが…」

「ほう…」

シオは二人に計画を話し始めた。



「実は、来年あたり、そらの避妊薬やめて孕ませ覚悟で調教してみようかと思ってます」

「えっ、マジですか？」

「小○生の孕んだ姿見たくないですか？」

「うー、見てみたい気もするけど…」

「この身体でカエル腹ですよ、ゾクゾクしません？」

「でも、経験上妊娠は面倒ですよ、周りの目もありますし、この母体で孕んで…産むにしろ下ろすにしろ、設備もいるし、病院に連れて行けないでしょ、こんな少女」

「折を見て田舎に戻ろうかと思案中なんですよ」

「あー、前に言ってた山郷にある、結構土地持ちって言うってましたよね」

「そうです、あそこなら人も殆どいないし、親ももういないから、相続して遺産もあるので数人で食ってく位余裕で行けそうなんですよ」

「本格的にそらを牝犬として調教してみようかと思ってるんですよ、山さんたちも一緒に住んでそらを調教しませんか？」

「まあ、ちよつとそそる提案ですね、というよりかなり魅力的です」

「でしよう！」

「でも、そらちゃんの親とか搜索願とか出てるでしょ…？」

「なんか、家庭の事情も複雑みたいで、そらも親と縁切ったと言ってる、ちよつと調べたんですよ、搜索願出てないみたいです」

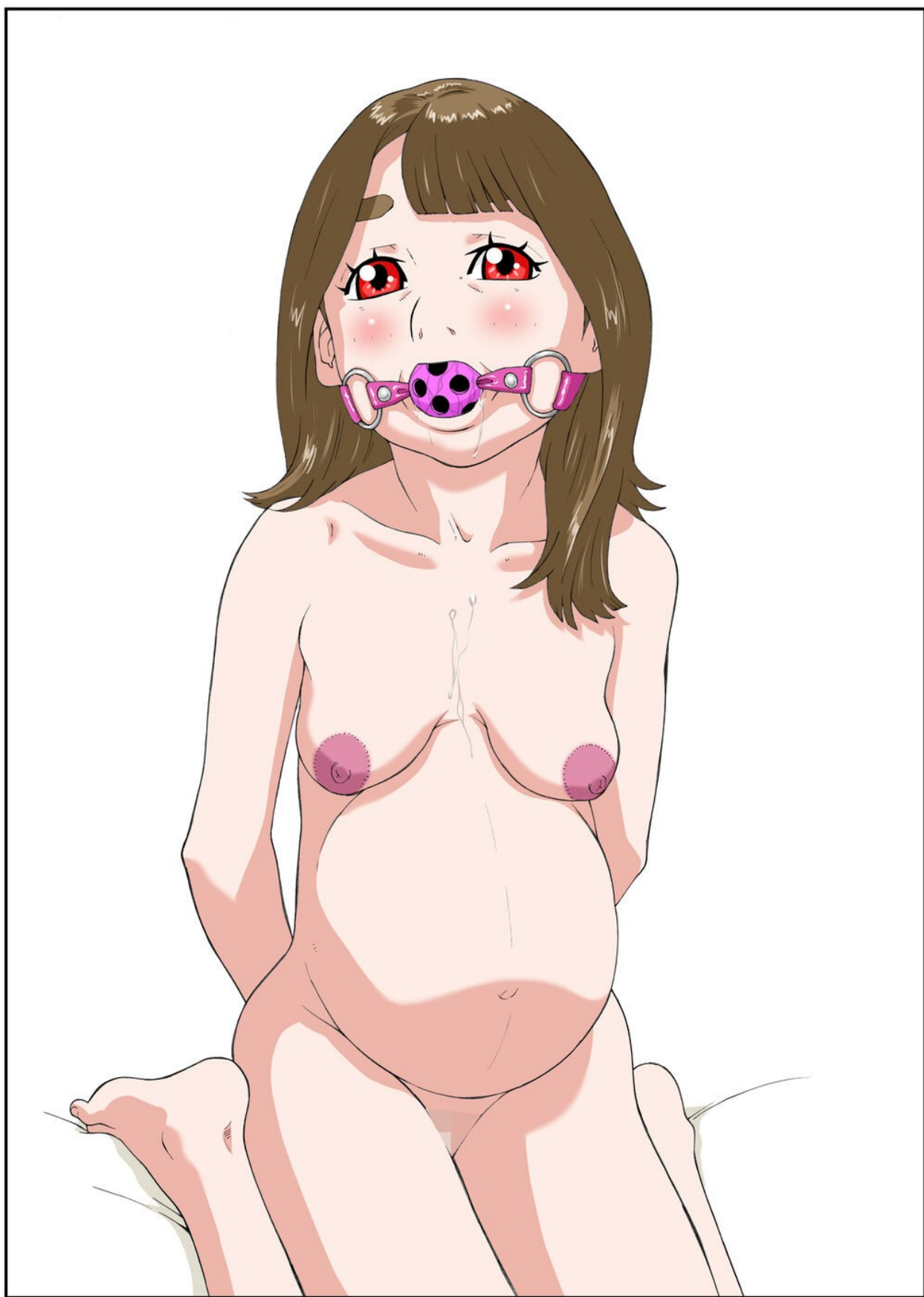
「ええ？マジですか？いくら何でも」

小○生の娘ですよ、そらちゃんの親って…」

「そらも行く当てもないし、まあ、ここまでやったら行くとこまでいかないと、ですよ」

「シオさん、鬼畜ですね」

「想像してみてください…」



「どうせ私たちは所詮ペドです、大人の女性と結婚なんて出来ないし、こんなチャンスは一生に一度ですから、孕ませた後は山さんの知識と技術が力を発揮するじゃないですかある程度の診療所並みの施設なら用意できるし」

「小野ちゃんは元役所勤めの経験と知識を生かしてもらい、そっち方面で協力いただきたいと思ってるのでどうですかね？」

「そうですか、そこまで考えてるなら、話に乗るのも面白いかもですね」

「山さんに賛成っす！」

「調教して、誰の子供を孕むのかも実験してみたくて」

「シオさん、前々からヤバい人だと思ってたんですがマジでヤバい人ですね！」

「お褒めにあずかり光栄です、ははは…」

ザーメンと汗にまみれたそらを他所に男たちの怪しげな計画の話は弾んでいく。

神待ち少女

終話



奥付
タイトル
制作年月日
制作
制作著作
連絡先☒

Twitter
その他

「神待ち少女」

2020年1月7日～2月4日完成

ももんが倶楽部/林原ひかり

林原ひかり

okosama@par.odn.ne.jp

ももんが倶楽部ホームページまで

@momongakurabu

pixiv/skeb/Ci-enやっています

※NOTICE Translate the following Japanese material info
English for use

以下の行為を禁止します

★著作者に無断で本作品のすべての画像をコピーし二次使用する事

★有償無償を問わずインターネット上にアップロードする事

★紙媒体・データ媒体を問わず未成年者を含む第三者に作品を提供・開示する事

違反者には法的措置を実施します

作品内における固有名詞等実在のものとは一切関係ありません
また、作品は架空のものであり実在の事件・事故等関連は
ありません

モモンガ倶楽部のグッズ工房(オンラインショップ)



BOOTH

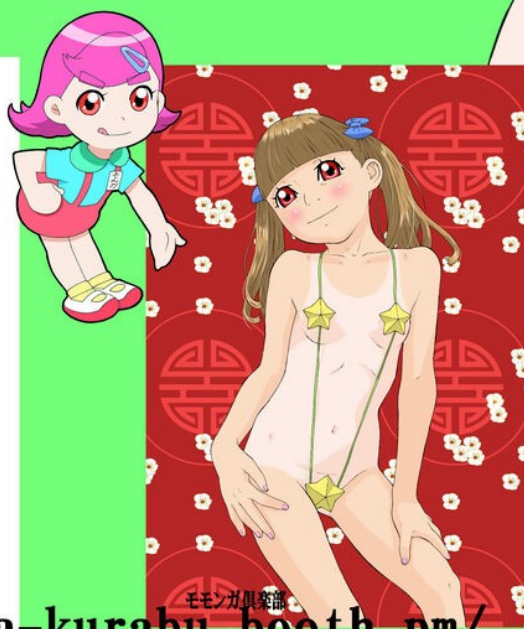
にて開設しました

衣類・アクセサリ・小物から大きな抱き枕・ブランケットまで多様なオリジナルイラストのグッズ制作をしています

BOOTHにてサークルのフォローをしていただき
こんなアイテムが欲しい、こんなのが見たい等の
メッセージをいただければデザインをいたします
実際にリクエストいただいても購入するしないは自由です
こちらサンプルを作る必要性が無く在庫等の
デッドストックが在りませんので安心してデザインが
できます。

制作は1個から受注です、製作期間は商品にもよりますが
およそ1週間～(時期によっても変わります)
制作はpixivのfactoryになります

現在下記のデザインの衣類を販売中です



<https://momonga-kurabu.booth.pm/>